



秘注
誹諧七部集

續猿蓑ノ巻

七

5
4514
4



門へ5
號 4514
卷 4

秘注誹諧七部集卷之七

續猿蓑之卷

八九軒空は雨降柳の南

柳の解眼前ナリ

春の鳥乃圍なる

沾圃

降ミラカドニリト柳ノ動カハル女ニアタリ隈ニ何来ニヤ野鳥ニ三羽下リ丹テ啼風情也上ノキ

初荷と依馬エも好乃羽折る

馬莧

都會ノ在ロトミテ鳥ニ馬エノアタリヨ味可見一乃ヲ多カナル位立前白ノキニ相應セリ

内々ととととと晚乃始まひ

里圃

昭和十一年
一月二十三日
購求

○鄧先三酒ナト振ニルモモ也振ニト言所カ趣向ナリ

きねふかき日和かき清る月の色

○キケンラ整ユクナリキノフカラフ詞ニ心ナリ

狗脊枯モ肌空ナリ那家公翁

○空ニキリテ霜ヲ催ヌ晩秋ノ會叙也但カ名ニト言語ニ心有テ附ナリ

滋柿とこしと風吹き多き

○枯ニ成テ寂寞ヲ言リ是ヲモ對附ノ一筋ナリ

孫可泣と衣祀又乃借残覓

○滋柿モトモニナテヨキ柿勿論ト言意聞テサレハ残物其カリ也古借錢残リル意通ジリ

服差々換下ほしめる旅刀翁

○無蓋ノ願出モ若盛無分別也但虚實ノアツカイ仰テ可見

煤を志まへいも也餅乃飯

○照差ヲホシガル意ヲ轉ジテ年ノ用意ヲ附テ意味ヲ老工可知

約束乃お多し提賣り来て

○年ノ暮用ヲ附テ但節分ノ式吸物ニ頼テ用ルテ武家ナドニ多シ

十里ちかしのよろし出切り

○附意ニ死活アリ但出ヤウニ多ク、邪魔ナト言意味ヲ含メリ

世名多し子還 埋て面白き

○伊一路

○郊外に出セリ但其人ナリ

あゝはあやまの書の翁

翁

○竹林にシテ名隠者柳ヲ詠ミ来シ人讀ムル書付也ラカニ有テ一巻ノ曲ナリ

いぼろの後の沙汰あき憎坊主

里

○其庵主也餘情ヲ催シ流増シ扉其年跡消ヤラズ残テトシテソウカキキ風情ナリ

やつとあやまの糸の尾連

見

○甥坊主有所モ知名ト博シテ本山参リガヲ尋訪フハ思ハク言リマツト、言語ハトウマラ

カフヲラシテトイフ意ナリ

有明日あくらくそふのあそあひそ

翁

○朝立趣ヲ除テタシテ詞ハヤトト言ヒロキキテトクモ同クハ詠メ

見事いぢ揃ふ梅のさくら

沾

○苗代ハキゲシヨキ風情ト則句ハ月花餘意深澤風色ヲ結ラトノエタリ

妻公空を居れり作太夫

見

○揃メ語ヨリ頼母子講ト趣向セ也但落札ト言フニ前句ハキゲシテ較系キタリト云ニ曰無用久各ト

思フヘカラス作字可味由雨塘居ス夜話ナリ

侍既力乃下向みるあふたりとあふ

里

○後日附也餘情前句ヲ逢テ物語ト為タリ但作太夫伊勢トノガサ又トキナリ

長持小奉の仲間控ツク

沾

ハツタリ言語り奪テ前句ノ實ヲ虚ニ附キ是ヲ虚實ノ変ト言

くいらりと志の晴るる空 翁

○前句ノ二章ノ一ノト為テコニ其ニ句ヲ解トシテ用ヲ述タリ是解用ノ変ト言

禪寺ハ一日遊ふ砂乃上 里

○三四ノノ運ヲコニ擣テ前句ノ心持ニ應セリ但書天語ニ砂ノ下ハ結ト詞ナリ

槻乃角張をそぬ貫穴 莧

○遊ノ字ヲ換骨シテ日マリ番近トイフ諺ニ附ナシタリ

濱出ーの舟日俵を運ふ形子 翁

○ハツタトシムルハ牛飼也トシ終日往來スレロキ牛ノアユヲ白ハセタリ

あふしめぬ嫁ハ隠す内證 沾

○牛ガフ人ヲ嫁ハ勿論ナガラ隠スノ語運送ノ俵ニ米サシヨアラカス下ノアハミ

月待ハ侍輩衆のうち楳ハ 莧

○表向テカハ今日血情也イソモキ料理セド此度ハ料理人モ雇フ名月待ナルベシ

籬乃菜乃名系をほく 里

○是附テ逃有也ウチノコト言ニナリサマノトモキナリ

群をよするて粟と核もむくは聲 沾

○其場ニシテ一ノ姿ヨカシク仕立タリ彼前ニ言如ク是ヲ微キト言味ニ可見

伴僧石一する駕のあ服 翁

門前木立上テ案内ニ進ニ姿趣ヨ言レ是ハ當門姿ナルヲ可味

削ヤリ母長刀坂の冬死風ノ里

○交テ言辭ニ名ニ用附テ坂名ヲ物ヲニ出リ但長刀坂洛西嵯峨ニモ又廣澤ト大澤ト間ノ坂也

まふとに星のこほさかすは 覓

○寒夜月夜リ名風情ヲ形容シテ

引立てて生理ノ舞ノまはあやのさ 翁

○起情ノ附ト言ニ物ヲ起シ名ヲ言リ鐘倉ニ靜メテ面顯トモ可見

夕川と火入ノれノす 薫 沾

○見物ノ人也艶情ヲ味ヒシハシ

花ももや強う思慕のちろノ程を 覓

○何下ナシ名々凡風情ヲ言フニ附句ナリ

濃ノりノらノのノある陽空の水 里

○時節ナリ

雀の字也揃ふを渡る鳥の聲 馬覓

○上五更楽曲有テ俗味ヲ離シテ平雀五十雀聲佳ニガナトノ名ナリ

そり系れ序乃面公子月夜 沿圃

○サシノ色凡鳥ヲテリ草木ト受テ夕景ヲ趣テ會テ夕月ヲ出ニ指面白キ語ニ幾句ヲ受テ也亦添附也

玄家を買く這入テ秋暮て 里圃

其場ニ廓外離家ト可見但方カラニ附ニテ世情ニ薄シク
里圃

あひ／＼あるをのそく 醜 里圃

○立派ヲ買テ這下言語脈ヲ下賤者イト言悦趣ト趣向シテ但亦越々雅ナル歌セリ

霜氣たる燕々ふ子供五六人 沾

○前ヲ駢ト附ヲ用ト為セ但卑賤ヲサテ附ニシメ凡ノ體

送をわびて外乃洗々 里

○狭キ住居駢ニ直前ノ雜炊ヲ毛ヲ食事ニテ井邊ニ立醜ノ句對ニテ覗ク用ニト

見極テ与衣集ニ附タリ 沾

悔しむるあひのそく 里圃

○市價ニテ不洗トモ也猶句駢慮實アリ但此句塵金ト見テ凡ノ意ニ非ス言ハ今

一歩取テ高又仕損各ト其日嗚可ト可見 沾

清状淋を車公ぬり 沾

○自他愛アリ可哀新念少尻輕ニ勤ク風情ヲ可見

夕暮さける茶前の天氣きつ 里

○四月朔旬可成但奉公ニテ人詞ト可見 里

有ふりト たる國方此客 裏

○氣以カニ下言詞ヲ起情ニ案シテ餘國久都十五堂リ金錢ヲ流チニカフヲ体ヨリ

と氣ツカハニ思フ意ヲ合ニテ是ラハ換骨ニテ亦越々論セハ例ナリ

何事とあくるめを皮駒近 沾

國方言京詞ニテ也其國方人モキガリテ見出ル但アリシ名ト言何トモナクハ微也

風より多きなる早稲の穂の月 里

道中筋博シ介駒率ノ通りニ蹄ノ静ナク語ヨ言リ

夢所 秋乃住姑女伝かしく 覓

前々風雨ノ荒有トシテ水難ヲ恐テノ趣向ナリ

座 既カハむアコ女房呼り至 沾

秋一字ヨリ古姓ニテ用言ト多シ但是ラハ一巻曲節ニテ乃三章ノ俳諧歌トモ言カ

明々つる仔勢流辛洲乃年籠 里

其夫婦ニテ附シカ辛洲ハ住勢雲津川ト云テ天野村ト言ニ隣ル辛洲太神宮ト言テ濱邊ノ勝地

△故ニ曰俗ニ御辛洲ト言貝トニ紅粉ヲ合奉ルナリ

簾ハ丸乃ハハの忠一億 覓

近村百姓ノ年籠ニ用意ノ簾ヲキテ床ニテオカシク言リ

俵米も志めりそ重き花成り 沾

貢ノ藏入前ニシヨケルヲ番スルトニタルナリ

去去月のある羊乃 染 里

其場ノ會釈也シメリト言語ニ静ナルトハ詞ノ移リナリ

鶯乃洛乃々雪を掃 覓

○テ字渡を教際アリテ言語ニ億ニテカクカヤリ

死を思合ふも物事を 居るを

沾

○掃残シ語ヨリ快ヨリキカサトシタリ

年々に家うちれ者中悪く

里

○厄人トシ持痛リテ年トカシライ死ナト言語撫着テ意味アリテ中悪クハ言リ

ニ濟教賀乃荷乃かまぶあを

覓

○船間屋普代親父トシサシニニカマク意味三但三埒ハ能登教賀ハ越前ナリ

汁の家ゆふ湯も茄子の出盛り

沾

○間屋朝暮ナルハシカク語出サカル詞ニヒキナリ

赤らけを妻をとあつ列を多作

里

○時節ヲ言言在賤ニ擣シタリ

口々ゆき寺の差圖々と書直

覓

○前乃ノ先ノ字ニニフ有テ堂塔廣々ヤウスアリ

殿乃即立の法を淋

沾

○狩獵ノ節ニ休テ寺院トシ名也

沙備を中し取つる忽小高ひ

里

○御留守城下ニシタリ取付メト言セニキ安アリ

卑下しとて度子と料理喰ふ

覓

勅當人カシレ方カリナル餘也庭臺所テ言取付又ト言ニ氣毒ノ意有レヒケニハ言リ

肌ノモ秋ノマツリ暮ル月

沾

○食事ノ時分ク月ニ整エテ詞ニ肌今トハ入リ

里

秋ノマツリ玉篋ノカケ

里

○月ニ偏チ名姿ヲ奇冷ナル情ヲ結テ賸用愛アリ玉篋ヲ玉守營其義ノ詞ナリ月ニ對シテ玉ヲナリ

秋盛ハ實乃母の女也問ト

覓

○此所句趣向起情ニ換骨也總母 邪見實母慈ニ泣意味有テ問トハ吊ニテ塞語ノコトナリ

里

有竹を田ノ出羽乃庄内

沾

○長流浪武士ト名ニ但起情ト云ニ論ナシ是又トテ例ナリ

里

直乃毛並ニ帷子肘の芳ハ袖

里

○世情ニ持シテ名ハ句ハ風流ナシ是又學ブベカラズ

里

夢ニ氣味トキ杉苗乃カセ

覓

○暑中ノ風情ヲ含テ雜句也意夏也

里

花乃陰葉ト多ク帷子其カセカ

沾

○勇ニ命風情有テ前句ト上七文字ニヒキナリ

水圍

あらし田のおもかく陽冬

里

○時節トトヘナリ

○

里

以々々之鷹引を中り嵐可那 里圃

○經緒有るマ子勢点大凡風情を引元詞和歌多々也子載集藤原仲實のヤウののありれ

有るを引きて字田のよたを狩らうらば

冬にのちまきれ 霜形から 花 沾圃

○朝嵐風情を添附也マ子木ノ類ヲ蔓生物也本依テ這上ルカツラナリ

蘿 苜乃そね 忠おゆゆーとまそ 翁

○大根根ノ趣向ナカラ人倫ヲケキテ山畑大根噂ト見内外ノ論ナキ作意也

上下に朝茶のむ秋 馬覓

○上下トテ噂スルノ口端ノ趣ヲ可思家三迄冬ニテ秋移シ名ニ育テ言語ヨリ本ツキタリ

町場、月見の頃乃集めの鏡 沾

○上下トテ言フ上可下言心三階ナリ

二何のちらくと通る 馬次 里 覓

○秋交代ノ時宣也折端ノ躰ナリ

知恩院乃替りれ噂極りて 覓

○後附テ二句一章ト言シカ

さくられ後ハ楓若ヤク 沾

○實門前ノ景色也但カリノ噂ト言語トニキテ櫻ノ後楓ト言リ

俎 鱸汁をうけ流し 里

○中庭躰トシテ料理茶房趣向也鳥物変アリ

目利 偽 家 ち り の 芳 一 白 茶

○目利ト本河強也メキノ語ハ異ニ毒悪ニヒキヨイテ上高魚白ナリ

状 箱 七 駿 河 の 飛 押 受 取 瓦

○メキノ小道具入タル箱ナラ但駿河ノ時宣意カラ故アル城下ナレナリ

申 魁 め の ち ら 忠 日 ね 新

○飛脚時宣ニ相應ナルベシ

草 乃 び 草 子 ぐ ち ら 水 乃 澄 ち き 里

○夕草跡ナドノ空ナリゲナキ依ナリ

佇 馬 之 氣 ぎ ち 綿 取 の 百

○綿時ニ雨ヲ嫌フヲ殊更也生駒山ハ河内國ニ大和跨ル但綿所ナリ

憂 旅 々 鴉 空 連 之 渡 鳥

○托物躰也托物ト啓物ト言フ也餘情ハ買メ女子ト連行道中ハ心ツカイヤツカフノ語ヨリ附メ鴉ハ

○小鳥ナカラモ殺罪ノ鳥故是ヨル者ニメウカナリ

有 以 高 一 明 ち 川 乃 空

○有以テ以テ也浪鳥高き語ハ鏡ナリ

茶 舩 乃 茶 の 中 ち ば ち 出 ち

○景也茶言テ宇治或ハ大炊川趣ナリ

鳥

菓

水

沾

菓

里

里

菓

水

沾

菓

里

水

菓

沾

里



柝の傍へ門をたてりし子

對附格ニテ三句一画モナリ

百姓の身も世間と長閑きよ

湘明の面影念ム都て面影カク幽微ニテテ所要ナリ

照り湯魚を膳に荒布に菜

式ヨクテハ心カクテテクテ物ニテ其安キ趣ヲ言リ躰用愛ナリ

賣物の信紙包に松葉餅置

商人宿モツテ將次更ニテ其體カク信紙包大望或時論ナリ

しるしの暑もかきしるしの暑もかき



里

荒

覓

真

沾

星

覓

覓

道邊ノ水蔭休ミ涼ニ井ル体ナリ

砂を遠く棘の中は絡線乃聲

暑中ノ風情ヲ形容スル但姿情ヲシテナリ

別と人々の心もあはれ

墓所ニテ其亡スルノ事聞テ泣ナリ

巨煙乃火心けり勝手を志のあはせ

後日隨也遠國ノ奉行ニ對シテ旅立ノ霞モウナリ

一石ぬきし確たる米

是亦後日附ニテ前句ノ實ヲツキテ運ビヨカルタタ手暇也

真

沾

里

里

成

覓

真

沾

折くく実眼の發象天氣相

里

○鴉アゲテ分リ置名米ノ下ノミニ他句也ヨミ至テ強ク骨折意ヲ含テ自今トス

作小加減乃遠く秋空をそそ

覓

○二句一躰ノ附ナリ

月影まこころを良を吸て見家

泊

○前句右一躰ナリ月影ノ天象ヲ暎ワズ猶其全ナリ

あゆみのうらに子給て家根ゆる

里

○新クゴヲ行氣ヲ吸テ早稲テ家根ノ前句ノ結ト可見

手拂母娘をやみそ嫁に沙汰

覓

○思日下言語ヨク移世ニ物又違ヒヨクミダリ躰用ノ変アリ

系官の成をもち給はるる

泊

○家督息子友達宿詞也但前句ノ用ヲ言サレバ其趣ノ論ナシ

花の跡躰踏乃かこり面白

里

○折下ニテ啗可成藤吹クセツト有カキモ子ヤカナルノ意ニ時節ヲ整ヤタリ

寺の心けある山陰の春

覓

○前句ヲ實ニ得ニテ泉水木石等ヲテフリテ昔ノミハキ風色ニ附ナセリ

冬々々々々々々々々々池乃鴨

泊

○与春共ノ附也但ヤレシキ形ナリ自然也

ひと雨降るあけの風

里

○暖カト言フナリト言用可知

猿蓑小波なる箱舟松原の那

沾園

○前猿蓑に己名漢名ヲ譬言也但集巻三に語リ此物ヲ擬合名忍テ可味

日ハ空リ花と静なり形不固

翁

○イカニ發句ノ餘情ト云々落首リ海趣向任テ吟可仰

水涸る池の中と道ありて

支考

○園景色ナラ水邊趣向變化ニ意アリト云々再興ノ意ナリト云々

條亦ありて果をいふは

唯然

○二カカミノ附ナリ

雞のあけのやをさす月

翁

○山床リノ辭ニ變化シタリ

通し此はまにまに秋

考

○語脈ニ見テ所有ノ趣向秋ニシテ店建ル言暮總ニ但秋ニテ可味

盆考まじ一荷をさす箱乃魚

然

○茶屋店トナリ前句ノイハ直キルト言用アリ

昼茶の癖をさす一魚り茶

翁

○聲音高ニ物言ケル音ニナリ也但直ニ語時節相應セリ

聲のあつとくもさびふあ語

考

○後口附也アケドク聞弁ル量ルベシ

中國ノ人ハ此ニ住ル者乃吉左右

然

○物語則快まりシト附弁但吉左右ト後句エキダシテ譲ル節ナリ

朔日の日を何處へやらの振口色

翁

○吉左右ニ朔日ハ移リ中國ノ朔日ハ天ノ氣ヲ相ラフニテクベシ思ハクナリ

一主羽おの矢をさる

考

○前角ナル如ク躰ニ変化シタリ

軒然

氣をいり水まき葉の湧れ根楓

然

○山遊ニナリミテ興ニ入ル故ニ體ニ前句ヲナラセリ

山中門あり乾辰明乃月

翁

○前ニ應ジテ趣ヲ整エタル也

福風團り人れわけあり

考

○有明ト言テ朝ノ言ヲ稟釋吹倒ル秋色ヲ言テ夜ノ前句ニシテ所見又卷中ニモナリ

水際光る瀨乃小籟

然

○是其場ニシテ所意句意分明ナリ

見えて通る紀三井と茶の咲かす

翁

〇五葉三三ヲ見テ通ル語ハ前ク用アリ与五葉号ヲ写ノ中ノ方ゾダイナリ

〇長持^{イニ物}トヒトナリニハク長キ目

〇二方一解也サレニ句ト相別シテチ我ノ論ナシ

東風ヲセノ又西ノ那ヲ北ニヤリ

〇イトノ語ヨリ出テ解用ト変セリ

けり手ノ脈ヲ大事ニから

〇定ラガレバ有リ風ト則脈解ノ心換骨ニ又ハチ我ニ論ナシ是又一例ナリ

後呼乃内儀ヲ今度屋浦ヨリ

〇長生ハ金宮ノ番ラシト言ハレシ猶後呼ノ女房持泰金ヨホト有リ

喧嘩乃沙汰モヒキモセラヌヨシ

〇有心附シテ先妻ヲ離縁セシワケモ色々ナレバ

大切ニ日ノ二日オホキ暮乃鐘

〇孝道ノ極カ両親ノ忌日ニ建候ナレバ慎ノ趣向ナラシカ

雪カキ分——中乃泥瓦

〇高宗ニ霜月法合有テ可思其時ヲ言リ

未ズ酒ノ余撰ハクハ出カ家ノ衆

〇驛路ノ女ヲ持セリ但越ノ鐘ヲ釋放頭心正ニ出家ヲ附ナリ

真乃世並ニ近年ノ作

位ニ上ルニテモケンヲ整エテ
考

酒 ちりも青乃 安き月ス一
考

○其地ノヲ述テ愛アリ但酒堂トモ理屈テ死クナリ可味
然

赤 羅頭を 庭乃 正面
然

○酒店モヤナルル
然

定 ありあ娘乃 心と 若月
翁

○正高ニ字毎向ヲ起シテ鉢植ナリ向ハセ井名有サリ言ハレ
然

森 行ハカト 清も 方此夢
考

○是乃曲節ノ変化ニシテ道理ヲ附名也但夢想ノ意ト見ルハ政ニ曰者ガ句ト時トシテ理ガ考アリ

○得テ可味ヨ白雄鳥ト夜話也ト節説アリキ
曲翠

鳥 竹籠を けらり 松の風
然

○虚言又可味
然

大 二つ 心け 夢の 家
翁

○大家ノ風情トシテ
惟然

米 搦もり 帰る也
考

○下ニ三擲シテ普請ノ用アリ
然

あり 身を 市の 中を 押合
翁

○今日ハ内ニ開シケレト言ヒテ市日ノ店先群集ヲ附テ米搦ノ押合ニハラス

初あはれ星強生ハ花のけもたうて

然

○繁花地ハ寸地モアキ地少ク花ハ色モナカラン

鴨子替油乃ヨシ秘思表

考

○花ケモナクテト多ク餘寒ノ意ニ速テ作セリ

今宵賦

支考前文畧之

夏の夜也山崩せし明一冷小物

翁

○冷小物ハ飲食ノ多ク盛夏ノ變應テト盤杯ニテ狼藉短夜速ク飲明シ名席中ノモウヲ明レテ

明シトク作シ至リ

露とらりり蓮乃椽先

曲翠

○折添腰テ池裾ヲ冷シ物ニ對シテ俯リ發句ニ涼シキ情有ハ服ニ猶其意ヲ含ム

鶯とんそをれほと子音を

カ

固高

○アガキ奈豆夏蘭ヲ寂寞花躰ヲ言リ但前句ノ靜閑ナルモアサヨリ出ス但前句ノ質ニ當リ

文ナリ是文質ノ變ナリ

古き草籠り及故か一込

惟然

○コシ方ノ詠草ナド取テアサヨリカ目ノ暮ルニ鶯ヲアササ也但前句ヲ飼鳥トミコミタリ

月影れ雪も近し家雲此色

支考

○久信龍リノ用意ニ張マラス餘情アリ

志まらそ 沙をワケる駕舟

翁

○カミル所ニシテ俯シトセバ言靡附可成コトヲ袒前ハ野約有テ唯々暮風情ニ附至リ但用餘分チヤリ

猪ヲ狩場乃外へ返逃翠

○見物ノ人ヲセ来ルラン但駕輿ニ猪ハハ位ニ其物理ヲ整エタリ文秀

山カから石ノ谷カを書カを山カ高高

○其場ナリ其邊ニテアノ運ニ捨置テ餘情ヲ言ハカド引テ邪魔大立ラズ兼然

飯櫃カヤカ面カ柿カカカ火カ赤カ録録然然

○石切辨當カ為タリ但古カ我ノ人具ナラン言ハリ未知又人論也亦哉武將場カコト卑賤カ愛也

女多カコカエカ夫カカカ高カたるカ思思降降相相考考

○中食休カニシテ膝カニテ手ヲ組カ空ヲ詠メ凡思直カル人々古也曲翠

秋カの事カ一歌カ日カ讀カカカ橋カ乃番番翁翁

○水邊カ愛アリ愚カテ天有ヨリ其冬カ迄メタリ但橋子カル言歌カハ秋意カ年ぬカかカひカおカりカ

○ひらカやカほカーカ三日カ竟道カれ橋カ寺翠

持佛カのカ庭カ々カ日カ々カニカ心心翠翠

○狭カニ住居カノ簾カニ但執中カ可味カ亦哉ノ照降カ言語カニテ各論カニ但カ二方カカラカ三カナリ翠

平カ畦カ小カ菜カをカ前カ立カ小カ良カ跡跡考考

○執中カ也乃カ一カ簾カニシテ故カニ其庵カ菜園カニテ附カタリカ簾カ用カアリ翠

秋風カのカ心カ乃居風呂カ然然

○其場カニシテ用簾カ愛アリ但此カ三ノ運カニ初カ学カ人迷カテ所カナリ持佛カ居所カ噂カナガラ家根カ廂カ椽翠

坐鋪ナド、言類ニアラテ持佛一休ノミテ至テ程シコト以テ門ト云フ所ナリ

馬牽テ 賑ヒ 五める月の影 高

馬市ノ賑ナリ

尾流ト波ナリ 五める月の影 高

賑ト云フ却テ獨クニ 樽不但馬士ノ心堂ニテ夕落シテ来リ以テ

餅好乃今年此 為テ 野色ナリ 翠

後附ノ句一喜早也 五春也但漂泊行脚ノト為タリ各ニナルト言ヨリ頭シテト言リ

正月ノもの 襟ヒ ことト云フ 高

撫骨ノ附也 五重漚ノ 福ニヨコト云フコト云フ 高

去 風ノ音請のば 高

大ニ樽ニ齊 篤實ノ棟梁ナルベシ 高

藪ナリ 高

杖木ハ石運送便利ツモリ 近道ガ専用也 高

喰 高

稜道ヲ塞ク塞ガヌ 論有ベシ 高

何ぞ此 時 高

富士大山登山ノ先達ト為タリ 高

笠ツト云フ 捧メつけ 高

何々時ト言語脈眼前山伏ハアラテ噂トシシコト執中シテ親類縁者ト互夜営々々甘テ行籍トシテ

狭箱ヲ形容シタリトテ高

巖トハオチテ一井月照ル未 翁

○時節ノ宣ナリトテ高

桐宿ト迄多ク多ク矢木ノ所 者

○起情也家居希夏木立中物凄ク道連テ氣カフセシコト語ニキアリ矢木ノ所大和ナリ

際乃日和ト雪孔氣ニ云 然

○与妻共也氣カレテ語ヲアラシタリトテ高

飲心多ク七思酒乃別ト云 翠

○年用意日酒ナカラ氣ホツカレテ語ヨリキ酒ノ趣ヲミルナリトテ高

若方ト乃命を舟トあつゝ 高

○定休見酒店トシ介但手ヲセヌ語預ル心見詞ナリトテ高

封付ト女笈未ト月ト暮 翁

○遊女藝子ト包トモ見テ月見モウケ博シトナリトテ高

之後ト阿リト盆乃ト上臈迄 考

○与妻也二方一章也トテ高

虫籠ト四條乃角ト河原所 然

○都次女ト整子ト往來鯨中ト三幅袋悠然ト行風情ト可見虫籠屋今モ四條猶アリ

祇をあくる表 翠

其町ヲ流シテ高瀬川ト言舟モ又無ト言田屋ヲ揚ル荷物ナラニ有テ躰ナリ

今の間 鐘を見隠す 橋乃上 高

一躰ナレバ河原町ノ夕ニ附也荷ヲ上テヨミテ舟内ニ供人ヲケレ各ナリ

大まき 鐘乃 じん 乃 吹 中 然

見隠 不言ヨリ供人 不調法トシニ聞ユルトニカセテ夕作 結トナリ

盛 なる 花 乃 亦 押 寄 考

北 離 高 雄 十 七 勸 學 山 下 為 天 附 夕

腰 乃 付 乃 下 高

イマダ 答ニ 茶 屋 身ニ 入ル 躰ナレシ

天保十四癸卯年 仲秋十日 写終

南総隠士

露桂庵政二

秘注 誹諧七部集卷之七

